

ジャーナリストとしてのカミュ

(その3)

平 田 重 和

《Alger-Républicain》紙が廃刊になった事情は拙論「ジャーナリストとしてのカミュ」(その2)の終りの部分で簡単に触れた通りである。戦争の勃発(1939年9月)と同時ではなく10月28日まで実際は細々と命脈を保っていたことも触れておいた。

1939年9月15日の《Alger-Republicain》紙は次のような簡単な記事を掲載している。

「今日以後、午後には《Le Soir-Républicain》紙をお読み下さい。この新聞は夜の出来事に関して完全な情報を諸君に伝えるだろうし、昼間のホットなニュースを諸君にもたらすだろう。

編集長：アルベール・カミュ

《Le Soir-Républicain》紙はアルジェとアルジェの郊外で販売されることになるだろう」^①

そして実際《Le Soir-Républicain》紙は9月15日に夕刊紙として発刊された。そしてこの夕刊紙の寿命は約4ヶ月と非常に短いものだったが、《Alger-Républicain》紙が廃刊になるまで平行して2紙が発行されていたという、後からみれば「戦争のせいで印刷費と配送費がはね上り」日刊紙の発行があやぶまれたことを考えると奇妙な現実があった。

《Le Soir-Républicain》紙の創刊号は「我々の読者へ」という表題をつけて次のような記事を掲載している。少し長くなるが、全文を引用してみる。

「《Le Soir-Républicain》紙の発刊は急を要する必要性に答えるもの

① Cahiers Albert Camus 3 ☆ 49 p

である。命がかかわりを持ち、流れる各瞬間が運命を決めることができるこの戦争において、大衆はニュースに飢え、真の情報に飢えている。

この新聞はそうしたニュースを大衆にもたらず。この新聞は過度に過ぎることなく又むなしい大言壮語をなくことなくこのことを実行するだろう。

一つの正しい立場はとるに足りなかつまらない《誇大宣伝》などなしで済ませることができる。

ここでは冷静さをもつことだけが唯一優勢となるであろう。

他の考慮も我々を我々の道からそらしはしないだろう。

我々の理想に忠実であり、我々は真理に忠実となるだろう。その為になれ程苦しみがあり、にがみがあるとしても真実の表現は解決策を強め、エネルギーを増進させる。

このことが情報高等弁務官 Giraudaux 氏が率直に大衆を教化すべくラジオ放送で約束しながら完全に認めたことであった。我々としては「トロイ戦争は起らないだろう」の著者が公言するプログラムに忠実であるよう努めるだろう。

昼夜の最近の出来事に関する我々の情報は改悪も偽りもなく提供されるであろう。

この厳しい努めを自らに課して、我々は共和国と民主シーの共有財産である正義と権利の立場を守る計画以外のものを追求することはないであろう。」^②

以上引用が少し長くなったが、「我々の理想に忠実であり、我々は真理に忠実となるだろう」とか、最後の部分にあるように「共和国と民主シーの共有財産である正義と権利の立場」などという青年特有のというよりカミュ特有の文言が散見され、後に世界の良心というような立場を意識して発言していたカミュの萌芽がすでにこの時期にみられる思いである。

しかし、実際この新聞は適確なニュースを大衆に伝える情報紙たりえたであろうか。一つ一つの記事を読んでみると、いわゆる情報紙であり得な

② ibid. 50p~51 p

かったことはすぐわかる。

「スタッフの数を減らし、〔……〕用紙を節約したため《Le Soir-Républicain》紙には、アピール紙となる道しか残されていなかった。そこで、ぴったりと息のあったピアとカミュは、たちまちのうちに、同紙をアナーキズムの機関紙にしてしまった」^③とロットマンは述べている。

《Le Soir-Republicain》紙は創刊が1939年の9月15日で、廃刊が1940年の1月9日である、とすると途中休刊日のような日がなければ117号発刊されている計算になるが、Cahiers Albert Camus 3（第一巻と第二巻）に公表されたものは、そのうち明らかにカミュが書いたと考えられるもの（Albert Camus と実名の署名がなされているもの、Jean Mersault のような素人目にもそれとわかるもの、その他 Zaks, Kéron, Irénée など偽名を使ったものなども含む）とカミュが書いた記事の理解を助ける意味で資料として掲載されているもの合計で49編である。

尚、Zaks, Néron などカミュが偽名を使ったのは検閲に対抗するための非常手段であったということだが、こうした偽名の記事をカミュのものとして判定したいきさつと苦労談めいたことは（la revue des lettres modernes）の Albert Camus 2 の中の Jacqueline Lévi-Valensi と André Abbou のレポート LA COLLABORATION ALBERT CAMUS A ALGER REPUBLICAIN ET AU SOIR REPUBLICAIN で触れられている。関心のある人は参照されたいが、筆者は偽名のもので彼らがカミュのものとして認めたものを尊重することで論を進めることを諒解してもらいたい。

さて、今回も新聞が発刊された時間的な流れにそって問題をみて行くことは非常に困難なので Cahiers Albert Camus 3 の編者たちが可能な限りテーマ別にまとめたものに従いたい。

1939年9月17日から12月30日までの10編の記事^④は終始、戦争反対と即

③ Herbert-R. Lottman 「Albert Camus」 227 p

④ かならずしも年代順ではなく、9月17日以後の日付は10/6, 10/11, 11/6, 11/11, 12/13, 11/16, 12/15, 12/19, 12/30 と配列されている。

時休戦の呼びかけであるといつて過言ではない。ロットマンが「同紙をアナーキズムの機関紙にしてしまった」と述べていることは先に引用した通りであるが、後にアルジェリア問題の際に、紛争から生じる暴力・殺人を絶対悪とみなしフランス体制側に対してはいうまでもなく F.L.N（アルジェリア民族解放戦線）の反抗に対しても否定的態度をとり生命尊重の立場をとって、左右両翼から味方とはみなされず結局孤立せざるを得なかった事情があるが、非暴力主義の立場で、底辺の民衆の側に立つというカミュの根本的な思想はすでにこの時期にあったことが確認される。

第二次世界大戦という大規模な戦争がどのようないきさつで勃発し戦禍を拡げたか、今この小論で触れる余裕はないし、又その場でもない。筆者はもちろん戦争肯定論者ではないし、起った戦争に対して理解を示す気持も持ち合せてはいない。大戦勃発の経緯は歴史学者によってすでに明らかにされていることと思われるが、そこには各国の政治的、経済的摩擦があり、民族の違いから来る誤解、恨み（ヴェルサイユ条約のドイツに対する過酷な賠償問題など）、更にはイデオロギーの相異など複雑にからみあって、不幸なことではあるが大戦は起るべくして起ったといわざるを得ない要素があろう。カミュも、もちろんそうした諸要素を理解しなかったわけではないことは確かだ。しかし、《Le Soir-Républicain》紙によったカミュの主張は戦禍が拡がる最中においてさえも戦争の中止を呼びかける論調に終始している。

ヒットラーの教義に対する反発は10月11日付の Zaks と署名のある記事にみられる。

「さて、このヒットラーの教義とそれに似ているあらゆるものは現実のあやまった見透しの上に、非人間的行為の目的と公準の上にあぐらをかきものとして拒否され、有罪宣告されねばならないものであるように思える。それがドイツ国民に課する制度によるよりも、それ自身によって、その教義は政治思想において、政治生命において、悪の最もいむべき形態の一つであるように思える」^⑤

⑤ Cahiers Albert Camus 3 ☆☆ 635 p

しかし、こうしたヒットラーの教義を悪とみなせば、この悪を撲滅するための新たな暴力は許されるか、否である。つづいてカミュはいう。

「しかし、この有罪宣告は、イギリスとフランスによってドイツになされた9月初めから始められた闘争を説明し、正当化することはできないだろう」^⑥ と。

なぜなら「実際、戦争は破壊と不慮の出来事ではない」し、「戦争で最も苦しんでいるのはポーランド、ドイツ、イギリス、フランス国民であることは明らかである」^⑦ からである。

「戦争は災害のうちで最も悪いものだと、Daladier と Chamberlain 氏は1939年8月の様々な奔走の過程で繰り返した。誰も正当に戦争は一国民の中で、健康的な解決、誤った考えの更生、社会的、経済的、政治的改革、知性と、心情と、政治形態と、法規則と経済的諸関係の更生を果すことの確実で、有効な手段でありうるとは考えることはできないし、簡単に受け入れることもできないであろう。なぜなら戦争は、その方法において恐怖と虚無でしかないし、その結果において不確実なものでしかない。聖戦であろうと、宗教戦争であろうと、イデオロギーが動機の戦争であろうと戦争は犯罪的に不条理なものである」^⑧ と記事は主張している。(樺点筆者)

このように戦争そのものに対するカミュの憎悪は11月11日付の記事においても次のような文言で見られる。

「ドイツ国民に対しても、他の国民に対しても何らの憎悪もない。一つの憎悪があるだけである戦争に対する憎悪が」^⑨

更に11月16日付の記事にも「戦争は消滅作用である。あるいは人間的豊かさや価値の破損である。精神的、物質的、知的、モラル的破損である」^⑩

⑥ ibid. 635p.

⑦ ibid. 635p. 同じような主旨の文言は11月16日付の記事643pにもみられる。

⑧ ibid. 636p.

⑨ ibid. 638p.

⑩ ibid. 643p.

というふうにも書いている。

これ以上カミュの戦争に対する憎悪の表現を拾い出すことは繰り返えしに過ぎなくなるだろう。

それではどのようにすればよいのか。

「1° ヨーロッパが修正されることを（過去の不幸なヨーロッパとは違うものを、ヴェルサイユ、サン・ジェルマン、トリアノン、ヌイイ条約とは違うヨーロッパを）2° ハッキリとした国家に所属している住民の分割は今後もっぱら、自由と民主主義の原理を応用した人民投票で調査された住民の意志に基づかせること」^⑩ である。

国家の意志とは元来人民が選んだ代表たちによって決定されるもので、人民の意志が常に国家の意志に反映されているように機能しておれば（原理的にはもちろんそうあるべきなのだが）問題はない。しかし、国家の意志と人民の願望の間に乖離が生じ国家がひとり歩きし始め、戦争をひき起すようなことになり、人民がそれを望んでいない時にはどうすればよいのだろうか。こうした問題は政治学の高度な問題に属する事柄でにわかな解決法が見出せるような事項ではないかも知れないが、カミュは個人を尊重する方向で次のように論をすすめる。

「個人が結びつけられている国家の主である与党の誤謬に対する個人又は少数者の基本的自由の保護、政府が介入することのできない人間の諸権利を認めることによることと、各国家の中枢にあって特別なグループに個人を基にした自立的な政府を与える地方分権による自由の保護」^⑪ このような自由の保護が確保されるなら個人と国家の間はスムーズに行くだろうというのがカミュの言いたいところのようだ。

更に次のような主張は現在のEC構想の基本原理に通じるところがありはしないだろうか。

「このように形成された様々な国家は、とにかく、それらの構成と主張

⑩ ibid. 638p.

⑪ ibid. 639p.

と制度がどのようなものであれ、経済的行政的プランの上で十分に協力する必要があるだろう。その為には公共事業の協力、富の共有、生活の基本物質の共有、コミュニケーションの手段、生産と交換のための販路と方法と努力の手段、連邦の形成に従って大事業の成就等々が必要である。かくして様々な国家の政治的自由は、それらの国家を弱めはしないであろうし、飢えさせないであろうし、窒息させはしないであろう。かくして、相互扶助と自立は和解させられるであろうし、自由との実際的に必要な結合、協力と独立などは和解させられるであろう」^⑬

10日後の11月16日の記事においても次のような主張をしている。

「この現実的に新しい国際的秩序は人間の幸福と、尊厳と、自由には不可欠のものであると私は思っている。私はこの秩序は実現可能と思っている。私はこの秩序は人間社会の現実的状态から出発して、厳しくつらいだろうが、完全に受諾し得るし、実現させうところの改良の努力を適応することで、うちたて得るものであると私は思っている。

私はそこに、可能で必要な救済があると判断している」^⑭ と。

それではこのような新しい国際的秩序をうちたてるためにはまず何をしなければならないか。戦争の停止が最終目的であることはいうまでもないことだが、カミュは当面の目標として休戦を呼びかける。

「必要な休戦、……勝利ではないが、必要な場合には妥協から生じる同意である先決されるべき休戦。休戦が静穏と研究と共感と相互理解における新制度を築く可能性を確かなものにし、大砲ではなく相互理解の言葉を話すことを可能にするならば先決されるべきは休戦である」^⑮ と。

S.D.N. (Société des Nations 国際連盟) があり、これが有効に機能しなかったのだろうか。国際連盟の評価に関する詳しい論述は歴史書に譲るとして、ここではカミュの評価を紹介しておこう。

「S.D.N. はそれがあるように示されているところのものになってい

⑬ ibid. 639p.

⑭ ibid. 646p.

⑮ ibid. 647p.

ないし、かつてもなっていなかったのである。〔一行削除〕S.D.N. は戦争を止めさせないであろう。このことは現在の形態においてS.D.N. を裁き放棄することで充分である〕^⑯

国際連明が充分にその機能を果さなかったことはおお方の意見が一致しているところと思われるが、カミュの上記のような手厳しい評価はどのような思想から出て来るのか。

「戦争の最初の犠牲者は民衆である」^⑰ という認識がそこにはあるように思える。「こうしたカストロフが20年ごとに蘇らないために必要な注意をしておくのは彼ら民衆のためであるように思える。必要だったのは Société des Nations ではなく Société des peuples であるのだ」^⑱ とカミュはいう。

ソヴィエト連邦に対する批判（12月19日付の記事）も含めて、カミュの戦争に対する批判は、まず最初に犠牲者となる民衆の立場に立つことで首尾一貫しており、そこには大きな破綻は見られないように思われる。国家よりも個々人の尊厳を重視したような論調、こうした傾向をロットマンは「同紙をアナーキズムの機関紙にしてしまった」という評言であらわしている。

しかし、先でも触れたように後のアルジェリア紛争の時にもそうであったように、「正義」とか「真理」といったものを高らかにかけ、こうしたことが理解されれば、やがては政治的な解決が得られるのではないかと期待したところに、良く言えばカミュの文学者として純粋であり得たところがあるし、悪く言えば複雑な政治世界の事柄にうとく甘さを露呈してそのため《Le Soir-Républicain》紙も読者を失う結果になったことはいなめないところではなからうか。

⑯ ibid. 649p.

⑰ ibid. 649p.

⑱ ibid. 649p.

Cahiers Albert Camus の編集者によって《Alger-Républicain》紙から引き続き「政治から論戦へ」というタイトルでまとめられた《Le Soir-Républicain》紙の記事は1939年10月30日付の記事と12月18日付の記事の2つである。

Zaks と署名された10月30日付の記事の冒頭は次のような文章である。

「我々の読者は、我々が我々の意見とは全く正反対の意見を公表するのに我々の新聞の欄を以下の意見を公表することに気前よく示す寛大さを評価するだろう。それは不敬なそしてあまりに容易なイロニイからではなく、現実をみる様々な見方に関して彼ら読者が実り豊かに考えることを助けるためであるということを彼らは理解するだろう。我々としては我々は我々の貧しくてかつ弱々しい手段をもって、困難さがあるにも拘らず自由に思考する我々の努力に忠実である」^①

これに続くところは「oui! oui! 完全な順応主義のマニフェスト」という小見出がついており、696ページから708ページまで約13ページにもなる長い記事になっているが、「決然とし、意識的な順応主義者の我々は政府が言いかつやる事すべてを十分に評価することに決めた」^② という出だしが示しているように国家の指導者である、Daladier 政府のやることには間違いがなく一般民衆は唯エリートである彼らの指導力を信じてついて行きさえすればよいという主旨の繰り返えしであるといっても過言ではないであろう。これはミュンヘン協定に調印し、そのために以後ヒトラーの横暴を許すようなことに手を貸し、フランスを戦争にまき込んだ首相 Daladier に対する痛烈な皮肉であることはいうまでもなからう。

「ジャーナリズムの倫理学のために」というタイトルでまとめられている一連の記事は文字通り、ジャーナリストとして寄るべき態度の表明である。

① ibid. 696p.

② ibid. 696p.

まず第一の態度としては「真実」につかえることが表明される。

「《戦争という観点の下で》というタイトルで、我々は情報家としての役割を完成する。我々はより一層効果的に真実に仕えるだろう」^②と1939年10月4日付の記事で述べている。

実際的な方法としてニュースが絶対的にコントロールされないためにラジオニュースが利用されていたことが紹介される。

「我々の公用文書は公的な検閲に従わされたラジオから翻訳されたものであることを正確にしておこう」^③と。

ロットマンによるとこうして得られたニュースでさえも検閲官によって削除されることがあり得たということだが、《Le Soir-Républicain》紙の態度は次の文章からも明らかであろう。

「我々は永続的で真なるもの、すなわち精神の自由と独立につかえるであろう」^④

「真実に仕える」とか「精神の自由と独立に仕える」といった抽象的な言葉で表明されている具体的な狙いとは何か。それはいうまでもなく戦争の最中において平和を求めるということである。

新聞が世論に対して持つ力というものをカミュは充分に知っていた。

「新聞は意見を作ったり、こわしたり、意見のある方向へ導いたり、ブレーキをかけたり、激化させたりする。ある著名な閣僚は一つの戦争を作りだすのに6週間の新聞のキャンペーンがあれば充分だと言っていた。彼は全く正しい」^⑤と12月7日付の記事で述べている。

客観的にみれば《Le Soir-Républicain》紙のフランス世論に対する力は微々たるものというか、実際にはアルジェの極く一部の読者しか動かし得なかったというのが現実だが、ジャーナリストとしてのカミュは、息

② ibid. 718p.

③ ibid. 719p.

④ ibid. 720p.

⑤ ibid. 733p.

苦しさを感じさせる程自己の主義主張に忠実であろうとする。

「繰り返してはいけない誤ちというものがあることを我々は考えている。フランスの世論の大部分は何年もの間、ヴェルサイユ（条約）の誤ちに対して抗議して来た。我々も又そうであった。我々の意見を変えさせることができるものは現実的な出来事の中には何もない。我々は《この誤ちは新しい戦争を導くだろう》と言いつけて来た。そして新しい戦争が今やある。この災害に直面して我々の感情については語らないでおこう。ただ我々は我々の信念を述べただけだ。我々は熱狂せず、責任ということを十分に意識して戦争の最中で、平和が検討されることを、もっと正確に言えば永続的な平和が結論づけられる手段が検討されることを要求する」^⑤

これは11月6日付の記事である。ドン・キホーテ的であるかも知れないが、堂々と論陣を張るところに青年カミュの姿を見る思いがする。

「かれは戦火たけなわの頃においてさえも、平和に至る手段が尊重されることを訴えた。かれはヒトラーの言葉にではなく、国際協定、全面的軍縮に望みをかけていた。ドイツの独裁者の要求は、正当な要求と不当な主張とが奇妙に混ざりあったものであったが、国際政治はその正当な要求を拒否してきたために、ついには不当な主張まで認めざるを得なくなったのだ。ヒトラー主義に反対しながらも、かれはドイツ国民が辱められることのないよう、またかれらに対して正当なものを与え、正当ならざるものを拒否するよう訴えた。かれは真実を擁護する権利、絶望しない権利、集团的自殺を阻止できるような価値を守る権利を要求したのである」^⑥ とロットマンはカミュの記事を適確に解説している。

小論の目的はジャーナリストとしてのカミュを追っかけることで、文学作品とのかかわりはあえて捨象しているが《Le Soir-Républicain》紙のジャーナリストとしてカミュが絶望的な状況に置かれていた頃の1940年1月1日の社説と、「異邦人」の最終章の類似性をアンドレ・アブーが指

^⑤ ibid. 721p.

^⑥ Herbert R. LOTTMAN 「Albert Camus」 229p.

摘し対照させているので紹介しておこう。

引用文は原則として翻訳しているが、この場合はフランス語の原文のままあげてみる。

- | | |
|---|---|
| <p>Éditorial (1^{er} janvier 1940):</p> <p>1. 《 Qu'importent, n'est-ce pas, les désirs de l'individu, l'appel du bonheur, ou l'avenir pérusabbe et secret de l'homme tous les jours.》</p> <p>2. 《 S'il est vrai qu'oublier est un peu consentir, alors ne nous endormons pas [...] ne détournons pas nos yeux de cette amère réalité qui nous dépasse et nous écrase. C'est en cela que nous accomplissons notre devoir d'hommes [...] Ne souhaitez rien, mais accomplissez.》</p> | <p>L'Etranger (chapitre final):</p> <p>1. 《 Que m'importaient la mort des autres, l'amour d'une mere, que m'importaient son Dieu, les vies qu'on choisit, les destins qu'on élit, puisqu' un seul destin [...] (La pléiade, I, p. 1208)</p> <p>2. 《 [...] il voulait savoir comment je voyais cette autre vie. Alors, je lui ai crié: "une vie ou je pourrais me souvenir de celle-ci"》 (Ibid)</p> |
|---|---|

記者経験が作品に投影されている個所の一つといえるだろう。

《Le Soir-Républicain》紙は絶えず軍の検閲に悩まされ続けていた。

先で触れたような Zaks, Irénée, Jean Mersault など様々な偽名が用いられたのは実は検閲の目を攪乱する一ツの方法だったようだが、アンドレ・モロア, モンテーニュ, パスカルなど文学史上の大家たちの文

章を引用し、検閲に対抗したりもした。しかし、こうした文章も検閲され削除された。面白いのは、ジャン・ジロドゥの「トロイ戦争は起らないだろう」を引用しようとした際も削除されたことである。1939年11月27日付の「我々に対する検閲」と見出しをつけた記事で「検閲はためらうことなく、検閲の精神的長であるジャン・ジロドゥ氏を検閲した」²⁸と述べている。面白いといったのはジロドゥは当時フランス政府の情報省の役員だったからである。

「真白いページの真中に『《Le Soir-Républicain》紙はどこにでもある新聞とは違い、スローガンだけしか残らないこともあった」²⁹とロットマンは述べているが、12月18日の記事は皮肉たっぷり「おお、純潔よ！ 白よ、ヒマラヤの高みの侵されたことない雪よ。おおいなる白よ！……すべては無だ！」³⁰と絶叫している。

《Le Soir-Républicain》紙が廃刊に追いやられた経緯についてはロットマン以上に詳しい調査は今のところないと思われる。

「1939年12月28日、グード中將は《Le Soir-Républicain》紙の編集部長宛に（検閲の任務を帯びた陸軍中佐の報告に従って）手紙を書いて、同紙が責任ある士官によって削除された記事を掲載したこと、並びに12月23日、《Le Soir-Républicain》紙の編集部長が『無作法な脅し文句』の手紙を書いたことに対して抗議を行なった。その結果として、『私は君を懲戒処分にする。しかもこれは君に対して加えられるやもしれぬもっと重い制裁とは別のものだ』³¹とグード中將はつけ加えている。

一方、ピアとカミュは「過激な新聞の株主を続けたがらなかった」重役

²⁸ ibid. 753p.

²⁹ Herbert R. LOTTMAN 「Albert Camus」, 228p.

³⁰ Cahiers Albert Camus 3 ☆☆ 710p.

³¹ Herbert R. LOTTMAN 「Albert Camus」, 230p.

資料として Cahiers Albert Camus 3 ☆ 51p を参照されたい。

会のメンバーたちとも対立するようなことになった。

「次いで1940年1月10日、《Le Soir-Républicain》紙のオフィスに、カミュ宛の公式文書が届いた。アルジェ県知事の要請により、県特別警察本部長は、編集部長に対し、今後新聞を発行停止処分にする旨通告するというものだった。警察官の求めに応じて、カミュはこの通告に副署」^③した。

更に「政府が《Le Soir-Républicain》紙を発行停止処分にした時、カミュはそんなことをする権利はまったくなかったにも拘らず、まるで自分が社主であるかのように、通告の文書に勝手に署名」^④をしてしまった。

1940年1月9日号をもって《Le Soir-Républicain》紙は廃刊となった。^⑤

この新聞の編集部長でなくなり、同時にジャーナリストでもなくなったカミュはその後どうなったのか。

従来、定説のように信じられていたのは「国外退去を命ぜられたため、即刻アルジェを発ってパリに向った」ということであった。

しかし、ロットマンによるとこのような事情ではなかったようだ。

「この頃のカミュの状況については、これまで実にさまざまな噂が流されてきた。かれはオランで身を隠さねばならなかったとか、フランスに追放された——あたかも、過激分子と見なされた人間が前線に追いやられることがあったかのように！——とかいうのがそれである（戦闘的コミュニストのような、本当に危険な人物は、南部砂漠地帯の抑留キャンプに送られた）。現実にあったと思われることは、カミュが職を見つけるのにたいへんな苦勞をしたこと（……）また、ついにかれが一つ職を見つけた時、素早く政府が介入して、かれからそれを取り上げてしまったことぐらいである」^⑥ というのがどうやら本当のところらしい。総督府にとって小部数

③ Herbert R. LOTTMAN「Albert Camus」, 230p～231p.

④ ibid. 231p.

⑤ ただし、Cahiers Albert Camus 3 には9日付の記事は掲載されていない。

⑥ Herbert R. LOTTMAN「Albert Camus」, 234p.

の発行数しかない新聞の若いジャーナリストなどそれ程恐れるに足らない存在だったというのが現実かも知れない。

1940年3月にはアルジェリアを離れ、パリでピアの世話によって「パリ・ソワール」紙に職を得、入社している。ただしこの新聞ではジャーナリストではなく編集庶務係という平凡な職種であった。

《Alger-Républicain》紙と《Le Soir-Républicain》紙のジャーナリストとして記事を書いていた頃は、拙論「ジャーナリストとしてのカミュ」(その1)の最後のところでもちょっと触れたように、不条理の作家としてのキャリアを確実なものとしている重要な時期でもあった。「異邦人」、「カリギュラ」を書き続け、「ベスト」の登場人物グランの妻ジャンヌのプロフィールやコタールの首吊りに用いられる場面が「手帖」(1938年12月)に現われるのもこのころである。一方、仲間たちと企画した雑誌「リヴァージュ」の巻頭言を書き、「結婚」を刊行している(1939年5月)。「シジフオスの神話」が企画されたのもこの頃である。こう見て来るとこの時期は不条理期の主要な作品が懐胎され、形成されつつある時期である。このことも拙論(その1)で触れたが、不条理期の作品に共通していえることは個人の幸福の追求であるといっても過言ではないであろう。ジャーナリストとしての経験が作品形成に影響がなかったなどとはいえない。先のアブーの引用部分からみても明らかなように、「異邦人」にはかなりの部分ジャーナリストの経験が生かされているといえるだろう。このような観点に立てば、文学の仕事とジャーナリストの仕事は別物であるとはいえない。

しかし、政治や社会の不正と悪に対して Non といって立ち向ったジャーナリストとしての仕事と作品から得られる傾向とは一見かなり異質なもののように思える。アルジェリア期の「ジャーナリストとしてのカミュ」をみようとして作業を進めて来たのは作品からだけでは得られない何かがあるのではないかというささやかな見通しがあったからである。果してこのような作業が有効であったかどうか十分な自信はないが、2つの異った傾向が次の段階では一つにまとまって行くのがみられる。個人の

幸福がやがて集団の幸福へと拡がりを見せることはこれ以後の作品を見れば明らかなことだからである。

「ジャーナリストとしてのカミュ」を完成させるには、「コンバ」時代のカミュ，更に週刊誌「エクスプレス」誌の記者としてのカミュをみなければならない。しかし，今回で一応アルジェリア期の「ジャーナリストとしてのカミュ」を終えることにする。

(本学教授)